

2015年11月15日 MJCC 礼拝メッセージ (要約) 柏倉秀吉師

聖書 : マタイ 6 : 11

タイトル : 「私たちの糧を今日も」

マタイ 6:11 から、主の祈りの後半の祈りとなる。これは「私たちのための祈り」とも言える。

さて、これまで主の祈りの前半の祈りを一緒に確認してきた。

まず初めに主の祈りは、「天にいます私たちの父よ」と神への呼びかけから祈りが初められていた。この「父」とは「アバ=お父ちゃん」と、父なる神に対しての親密で豊かな信頼関係を持っているゆえの「呼びかけ」である。すなわち祈る者は、父なる神との親しい交わりをしっかりとみつめ、自覚している者でなければならないのである。

だからこそこの祈りは、父なる神に対して「アバ=お父ちゃん」と呼んでもなお「許され」、「受け入れられ」、そして親しい信頼感関係の下で呼びかけることができる「祈り」となっているのである。

次に「御名があがめられますように」とイエスは祈られた。

「御名」とは神様ご自身のことであり、「あがめる」とは、聖とすることである。それは「神が神としてたたえられる」ということである。この現代の地上では、神の御名がたたえられるどころか、実にこの神の御名が汚され、馬鹿にされ、無視されている現実を知るのである。「神が神としてたたえられていない現実」に、私達は涙ながらに「御名があがめられますように！」と祈る者でありたい。

次にイエスは「御国が来ますように。」と祈られた。

「御国」とは、「王国」である。それは「王である神の王国」である。

私達はその王である神が完全に支配しているその王国に、罪人であったものが罪赦され、救われ、王国の一員と認められた者である。それゆえに「どうか王であるあなたの御国が、王であるあなたのその王国が来ますように！」と切に待ち望み、それがこの「地にも成されて行きますように！」と、主の祈りの前半の祈りは、「父よと呼びかけ」、「御名が！御国が！みこころが！地にも！」と神に対する賛美、告白、またみこころを求めた、神ご自身への祈りであったのである。

それを受けて後半の「私たちのための祈り」へと向かっていくのである。ですから 11v だけを取り上げて祈るのではない。

神への祈りがあってこそこの「私たちの日毎の糧を与えてください。」と、自らの必要のためにも祈るようにと、イエスは教えているのである。ウェストミンスター教理問答集の中の「祈禱とは何ですか」という問いの答えは、次のようなものである。

「祈禱（祈り）とは、神の御意思（御心）に一致することのために、キリストの御名によって、私たちの罪の告白と神のあわれみへの感謝に満ちたお礼を添えて、神に私たちの願いをささげることです。」

とある。ですから、自分たちの必要のためだけに祈る祈りというのは、祈りの本来の目的を見失った祈りとなってしまうのだが、そのことが分からなくなるのが人間である。そのことが、民数記に出てくる。

民数記 11:1-6, 31-34

「11:1-6 さて、民はひどく不平を鳴らして主につぶやいた。・・・」

また彼らのうちに混じってきていた者が、激しい欲望にかられ、そのうえ、イスラエル人もまた大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも。だが今や、私たちののどは干からびてしまった。何もなくて、

このマナを見るだけだ。」

「11:31-34 さて、主のほうから風が吹き、海の向こうからうずらを運んで来て、宿営の上に落とした。それは宿営の回りに、こちら側に約一日の道のり、あちら側にも約一日の道のり、地上に約二キュビトの高さになった。民はその日は、終日終夜、その翌日も一日中出て行って、うずらを集め、—最も少なく集めた者でも、十ホメルほど集めた—彼らはそれらを、宿営の回りに広く広げた。肉が彼らの歯の間にあってまだかみ終わらないうちに、主の怒りが民に向かって燃え上がり、主は非常に激しい疫病で民を打った。こうして、欲望にかられた民を、彼らがそこに埋めたので、その場所の名をキプロテ・ハタアワ（欲望の墓）と呼んだ。」

彼らは、自らの欲望のままに願い、祈り求めました。非常に恐ろしいことに、主はそれを叶えてくださったのである。これは私たちの祈りとは、よくよく注意しなければ、自らの欲望を叶える欲望の墓への祈りにもなるというものである。私達は祈りの本質である神の御心を求めるということから外れてはならないのである。

今度はルカ 12:16-21 を見てみたい。

「ルカ 12:16-21 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

このこともまた、目的を見失い、今の自分のことしか考えていない、罪人の姿といえる。

さて、マタイ 6:11「日毎の糧を今日もお与えください」という祈りは、これまで確認してきたことから、「主よ、あなたの御心を行うために、そのために、どうか私たちに必要な糧をお与えください！」と、そういう祈りでなければならないのである。

では、MJCC の私たち一人一人はどうか。どのような祈りになっているだろうか。「欲望の墓」を掘るような祈りになっていないだろうか。あるいは、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる」と、主に言われてしまうそのようなことになってはいないだろうか。私達はそのことをもう一度自問自答しなければならぬと思う。そしてそれは今だけではなく、絶えず確認する必要がある祈りなのである。

さて、イエスはここで「日毎の糧」と祈られた。

この「日毎の」という言葉は、ギリシャ語ではエピウーシオスという言葉である。聖書の中では「主の祈り」にしか出てこない。ルカの福音書と合わせて二回だけである。

そのため、昔からこの「日毎」というのは、いったい「いつ」のことを指すのかと、今日でも多く議論されている。

新改訳聖書の下段、脚注を見ますと「明日のための糧」と「必要な糧」というように別訳として記されている。新共同訳では「必要な糧」として訳している。一般的には、これまで多くの場合「その日の糧」として解釈されてきたが、最近では、このエピウーシオスに非常に似た言葉が、「翌日」の「翌」という意味（英語では coming）を持っていることから、「明日のための」と理解するのが良いと、多くの神学者がそ

れを支持している。さらにこの言葉は、労働者や兵士に、翌日のために配布される一日分の食糧を指すために使われていた言葉の様である。そう考えると、この「日毎の糧を」というのは、「明日のために必要な一日分の食糧を今日、私達にお与えください」と祈っていることになる。興味深いのは、イエス様が「明日の糧のためにも祈るように」とも進めてくださっているということにもなるので、私たちの不安を実に安心させるための祈りにもなっているということである。個人的には、この部分からあの創世記にあった「夕があり朝があった」という、翌日のための備えをしてくださる主のご愛がそこにあるように思うのである。

しかし「明日のための糧を今日求めよ。」ということだから、二日分、三日分、更には一年分、十年分・・も、求めるようにとは、言われていない。

「今日も御心を行い、明日も主の御心を行えるように！今日、必要を備えてください！」と、私達は祈るのである。

マルチン・ルターは、この日毎の糧ということを次のように記している。

「日ごとの糧とは、食物と飲み物、着物と履物、家と屋敷、畑と家畜、金と財産、信仰深い夫婦、信仰深い子供、信仰深い召使、信仰深く信頼できる支配者、良い政治、良い気候、平和、健康、教育、名誉、また良い友達、信頼できる隣人などである。これが日ごとの糧に含まれる」と記している。

つまりこの地で、みこころを行っていくために私たちにとって、本当に必要となるすべてを含んでいるのが、この「日毎の糧」というのである。

さて、マタイ 6 : 11 の祈りには、「日毎の糧」という前に、「私の」ではなく、「私たちの」とある。

これは直訳すれば、この後半の主の祈りの中で実に 8 回も出てくる言葉である。つまり、この主の祈りは、絶えず個人的なものというよりは、複数の人を含んでいる祈りなのである。

ここに、私達は常に共同体であるという意味がある。それは教会も同じである。

一人の人が苦しめば、他もまた苦しみ、

一人の人が痛い時は、私達も（心の中では）痛いのです。

一人の人が病に伏せば、私達もその病の人のために、必死になって執成し、

また一人の人が、仕事が忙しくて、主を礼拝することが出来ない。という時、私達はその人のためにも、熱心に執り成しの祈りをするのである。

「私たちの日毎の糧」という祈りは、そのように私たちの隣人をも包んだ祈りでなくてはならないのである。自分だけ、我先にと事を行ったり、また祈る、そのような祈りではないのである。

今、世界では、飢餓のために 10 秒に一人が無くなっている現実がある。一日に 4~5 万人が亡くなっているというのである。

では世界にはそれだけ食料が足りないのか？というと、そうではない。世界の食糧を集めると、この地上で生きている人間に対して必要な約 2 倍の食糧が実際にはあるのである。しかし、世界の約 2 割と言われている先進国が、大半を買い占めており、さらに多くの食べ物を廃棄している現実がある。日本では、年間約 2000 万トンの食品が廃棄処分されているそうで、それは一人当たり 150kg に相当する量だということである。一般的に、穀物の割合で一年間に一人当たりに必要なのは 180kg と言われているので、そのほとんどが、廃棄処分されているという現実である。そういう意味でも、私達は自分たちの食生活をも見直さなければなりません。自分が満足すればそれでいい。というのではなく、私の隣人のためにもど

うぞ日毎の糧が与えられるように、そして、みこころが地でもなるようにと、私達クリスチャンは、この世に正しい聖い火を投げるよな、そのような祈りと行動を主の前にささげていく必要があるのではないだろうか。

さて、最後にイエス様は「きょうもお与えください」と祈られました。

「きょうはいいです。充分です。」というのではなく、「きょうも！お与えください」と、私たちの歩みというのは、本来自分で自分のために貯蓄する歩みではない。いつも主を見上げ、主の御心を求め、主に養われ、満たされて、主を信頼していく歩みである。献身者には特にそれが求められている。群れの模範となるように、主のみを頼りとして歩む歩みである。献身者が、自分には貯蓄が十分あり、神の助けなしにいつでも、自由に何事でも出来る！というのであれば、誰がその後をついて行きたいと思うだろうか。イエス様は、マタ 8:20で「すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」と言われたのである。確かにイエス様には家もなかったのである。全てが父なる神によって満たされていたのである。

私達は「きょうも」と日々祈らなければなりません。「きょうは十分間に合っています。今は必要が満たされています。」という歩みではなく、「主よ！きょうもお与えください！」と主に祈るのである。

私達キリスト者は、そのようにどんなことであっても主に祈り求めるようにと、主は、私達に「日ごとに」、そして「きょうもお与えください！」と必要を祈るようにと教えたのである。

こうした祈りをささげていくことを通して、確かに主はおられる！という主の栄光を私たちが共に見て、体験して、そして教会という共同体の信仰もまた成長させられていくのである。

主よ！私たちの日毎の糧をきょうもお与えください！